

北独シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭公演に見る「多様性」 2018 年シーズンを題材に

雑誌名	ハルモニア
号	50
ページ	13-30
発行年	2020-03-23
URL	http://id.nii.ac.jp/1290/00000294/

研究ノート

北独シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭公演に見る「多様性」

—2018年シーズンを題材に—

谷 本 裕

Exploring “Diversity” in the Concerts of Schleswig-Holstein Musik Festival in Northern Germany:
A Case Study of the 2018 Season

TANIMOTO, Yutaka

—はじめに—

筆者は、本稿でドイツ最北部の、デンマークと国境を接するシュレスヴィヒ・ホルシュタイン州で毎年夏に開かれている「シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭（以下、SHMF と表記）」の事業を取り上げ、その内容を検討することを通じて同音楽祭に見られる或る種の「多様性」に関する考察の契機としたい。

SHMF は 1986 年に設立された。毎年 7、8 月の約 2 カ月間、同州内各地で合わせて 200 回もの公演が、同時多発的に開かれている。州内外主要都市の劇場・ホールのみならず、各地に残るさまざまな遺産－歴史的・文化的遺産や産業遺産など－を会場に、国際的な演奏家のリサイタル、室内楽やオーケストラなど主にクラシック音楽の公演が連日行われる。これに加え、世界から選抜された若い音楽家を対象とする、オーケストラ演奏の教育プログラムをも併せ持っており、規模・内容ともに欧州を代表するフェスティバルの一つといえよう。

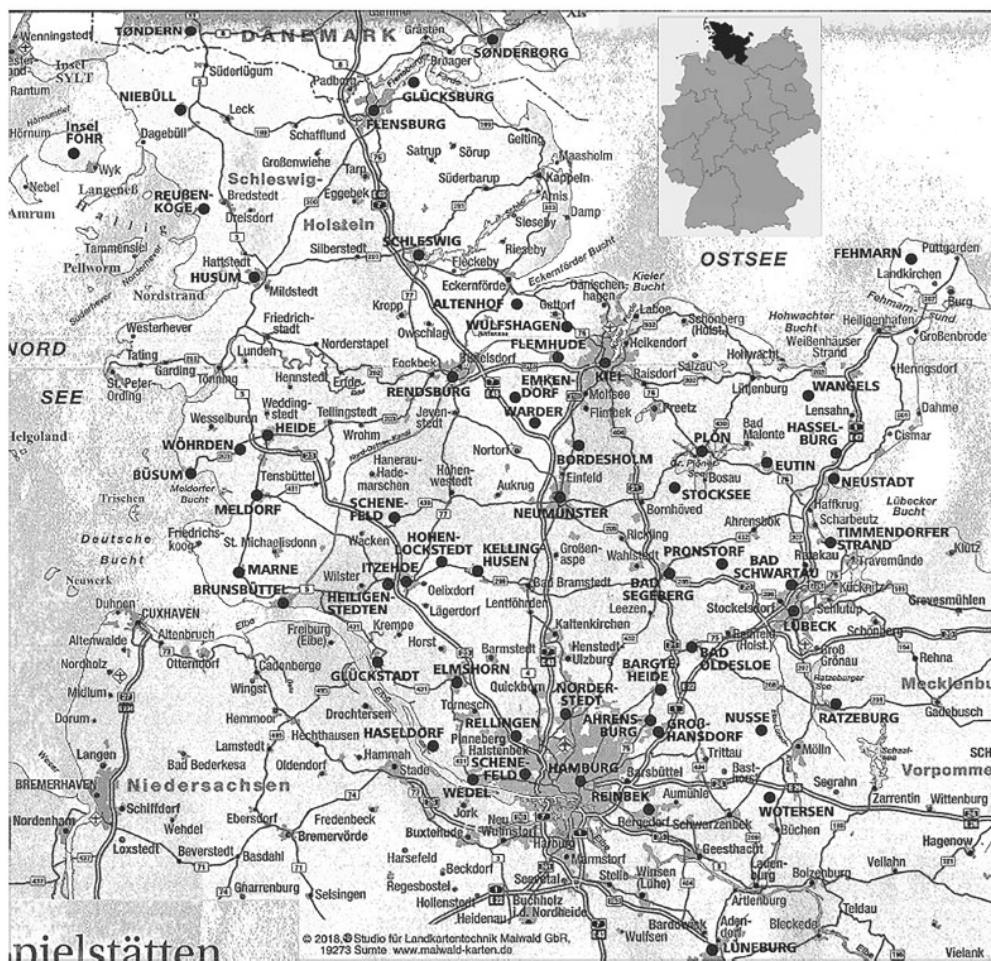
SHMF は米国のレナード・バーンスタイン Leonard Bernstein (1918 - 1990) が創設や特に草創期の活動に関わったことで知られている。指揮者・作曲家・ピアニストとしての活動のほか、教育者としても知られた 20 世紀を代表する音楽家である。

そして SHMF は特に日本において、このバーンスタインが北海道札幌市に設立した国際的な教育音楽祭「パシフィック・ミュージック・フェスティバル (PMF)」と対比する形で、「教育音楽祭」として言及されることが少なくないと思われる。PMF を追究している筆者の、SHMF に対する当初の興味もまた、そこから出ていた。

のちに述べる通り、PMF 同様、SHMF においても確かに世界から選抜された若い音楽家向けのオーケストラにおける演奏教育や成果発表としてのオーケストラ公演は、音楽祭の中で主要事業として位置付けられている。けれども、音楽祭開催中の現地を实际訪れてみると、それ以外の一般的な公演が盛んに行われ、極めて多くの聴衆を集めていることが分かってきた。実際、個々の公演のチケット入手に苦勞することも多いほどである。

そのような公演は、州都キール（人口約 25 万人）や、中世ハンザ同盟以来の古都リュベック（同約 20 万人）といった中規模都市はもちろんのこと、人口数千、あるいは数百の小都市・小村でも行われている。小ぢんまりとした佇まいながら、豊かな自然に囲まれ、ゆったり流れる時間に囲まれた、誠に印象深い「田園のコンサート」である。

そこではクラシック作品の作品演奏を中心とした、オーソドックスな公演を軸としながらも、それらを語りやダンス、現代アートと組み合わせたステージ、或いはジャズをはじめとするポピュラー音楽の公演、ロマやクレズマーといった民族音楽の要素を核に多様なジャンルの音楽を手掛けるアーティストの舞台も提供されている。さらにはコミカルでエンタテインメント的な要素の強い公演など、幅広い表現活動との協働を伴う公演が、この音楽祭の性格に欧州の伝統的なクラシックの音楽祭とは異なる、「多様性」を与えていることが感じられるのである。



ドイツにおけるシュレスヴィヒ・ホルシュタイン州の位置と、SHMF の主要な開催地

こうした諸要素は SHMF の創設にかかわったバーンスタインや、その盟友の音楽家でシュレスヴィヒ・ホルシュタイン州出身のピアニスト・指揮者のユストゥス・フランツ（1944-）が唱えていた理念との関連が感じられる。

SHMF について筆者は、論考『『バーンスタインの遺志』を探る－北独シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭－』¹⁾において一度、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州の概要や、SHMF の創設の経緯や理念、そこから導き出されている事業の梗概についての紹介を試みた。とりわけ公演開催地分布の広範さについては「全州津々浦々で」という理念が現実継承されていることを明らかにした。SHMF は元々、「音楽祭によって地域を振興する」、「すべての人に音楽をもたらし」といった理念が創設時に構想されていたことが、これまでの研究で明らかになりつつある。では、公演の内容に関しても、創設者の何らかの理念が現在に受け継がれているのだろうか。本稿でも、音楽祭の歩みや概要を見たのち、この音楽祭を彩る「多様性」について考察していきたい。

1. シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭

(1) シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州概要

シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州は、ドイツ最北に位置する連邦州で西部は北海に、東部はバルト海に挟まれ、北部は国境を挟みデンマークに接する。面積は約 1 万 5,800 平方キロメートルで北海道の 2 割、人口は約 288 万人（2016 年 12 月現在）で北海道の半分程度である²⁾。この地域は中世時代、ハンザ同盟の主幹的な都市だったリューベックを中心に、内外交易、商業で栄えた時期がある。1871 年、プロイセン国王によるドイツ帝国の成立とともに、リューベックは州となり、また近現代においては、ナチス政権時代にプロイセン州に併合された。第 2 次世界大戦後は英国の統治下に置かれ、1949 年ドイツ連邦共和国（旧・西ドイツ）の成立と共にその一州となった。東西ドイツ統一を経て、現在に至っている。

州都キールは、バルト海に面した港湾都市で軍港として伸長し、現在はスカンジナビア諸国、ロシア、バルト三国などとの交易拠点として繁栄している。

シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州は現在、観光や風力発電、医療、農業、食品、化学などを主要産業としている。しかし、州の総生産額全ドイツの国内総生産に占める割合は 2.8% に過ぎず³⁾、少なくとも経済的には「辺境の土地」、「田舎」と位置づけることができるように思われる。

(2) 創設の経緯と理念

SHMF が設立されたのは、1986 年である。日本では、この音楽祭が語られる際、創設者としてしばしばバーンスタインの名が取り沙汰される⁴⁾。彼が比較的早い時期からこの音楽祭に関わり、とりわけ音楽祭 2 年目にあたる 1987 年のアカデミーオーケストラの創設はバーンス

タインによる、と多くの文献が示している⁵⁾。しかし、この音楽祭そのものの創設については、ユストゥス・フランツ Justus Frantz (1944 -) が主導したことが先行研究によって明らかである⁶⁾。ユストゥス・フランツは、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州東部のテストルフ出身のピアニスト・指揮者で、SHMF の初代インテンドント（総裁）として9年間、企画や資金確保、そしてさまざまな制作面でも活動した人物である。バーンスタインとは1979年以來、個人的な交流があった。自ら少年期を過ごしたシュレスヴィヒ・ホルシュタイン州での音楽祭を構想する中で、国際的な名声を得ていたバーンスタインの参画をいち早く図った、とみられる。

バーンスタインの長男と、SHMF の主催団体を束ねる財団法人のインテンドント（総支配人）、クリスチャン・クーンツ Christian Kuhnt は以下のように記している。



SHMF インテンドントの
クリスチャン・クーンツ＝2017年8月、
キールの音楽祭本部で筆者写す

「前年1985年、ハンブルクで発行される新聞 Zeit 編集人で、かつてドイツ首相を務めたヘルムート・シュミット Helmut Schmidt (1918-2015) が、リューベック音楽大学におけるトークイベントのためバーンスタインを招いた。この折シュミットは、フランツともども、『傑出したアーティストが、珍しい場所に登場する音楽祭』というアイデアでバーンスタインを触発することに成功した。フランツによれば、このことによってバーンスタインを音楽祭の「精神的な父」としたのである」⁷⁾

また、当時バーンスタインのマネジャーだったクレイグ・アークハート Craig Urquhart は、バーンスタインがフランツのアイデアで触発された点について、以下のように証言する。

「フランツは、この地のユニークな風景を活用するビジョンを持っていた。小屋、領主の館、そして城を、この地域の住民に音楽をもたらすために活用しようとしていたのである。バーンスタインは、この考えを気に入り、フランツの構想を受け入れて、1986年から89年までの4年間、その実現のために時間を割いた」⁸⁾

バーンスタインの提唱で札幌市に、先に述べたパシフィック・ミュージック・フェスティバ

ル (PMF) が創設されたのが1990年。その前年までバーンスタインが、SHMFに関係していたことが分かる。上記の記述からはSHMFの創設構想はバーンスタインの独自発案でなく、少なくともフランツとの共同構想であったことが分かる。当時、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州財務省次官だったカール＝ヘルマン・シュライファー Carl Hermann Schleifer は「音楽祭が経済に貢献するエンジンとして、またトレードマークや広告塔として、更に土地を魅力的にする要因の一つになるべき」と考えていた⁹⁾。

数多くの公演と世界的なアーティストの出演が、「田舎」のイメージを大きく刷新する。その可能性に州政府が注目していたことが窺われる。この音楽祭が、「辺境の地」と目される同州に経済波及効果や文化的なイメージアップ効果などをもたらし、それに伴う州内外の評判や評価によって地域アイデンティティをも高めていく狙いを感じられる。それは単に、芸術の高みを目指すだけの文化政策というよりは、地域のアイデンティティや地域住民の教養を高め、また経済波及効果を期待する、こんにちの、文化経済学が「外部性」と呼ぶところの、新たな便益を見込んだ文化政策として理解されていた、ということができらるだろう¹⁰⁾。

それは正に、フランツの音楽祭の創設理念と重なるものだったように思われる。彼は2018年夏、SHMF創設に向けた理念に関する筆者の聴き取りに対し、最初にこう答えた。「設立の狙いは最初から音楽を通じた地域活性化でした。この地域の人々に私は、本当に世話になりましたから」¹¹⁾。

(3) クラシック音楽の民主化

先行研究によると、フランツは少年時代、家族がナチズムに抵抗したことから、政治難民として同州テストルフの大農場に移り住んだことがある。この折、同地の貴族の係累たちと共に暮らした経験を持つ¹²⁾。そこで音楽に親しみ、長じて音楽家として頭角を現した。一方、同州の経済力は先述の通り、ドイツ国内では高いものとはいえない状況が長く続いてきた。SHMFの創設前、彼の抱いた音楽祭の構想には、自分を育成してくれた地域への「返礼」「報恩」の要素が含まれ、地域振興を期したものと捉えることができるように思われる。

また、一方で、フランツが構想に込めた理念は「音楽をすべての人に」であるとの指摘もあり¹³⁾、これもまた現在の音楽祭の経営に受け継がれているように思われる。以下はSHMF財団の企画部長フランク・ジーベルト Frank Siebert の言説である。

「この音楽祭の理念は、フランツとバーンスタインのアイデアが一緒になって出来た。この地域(筆者註：シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州)は、文化的な活動やクラシック音楽があまり知られていない所だった。地元が無かった活動を、音楽祭が手掛け始めた訳だ。著名な演奏家は、なかなか田舎には来てくれない。小さな町に来てくれることで住民は非常に喜び、普段は公演に出掛けない人々も突然、ファンになったりする。地域の人々が来やすい場所で開催す

ることが重要だった」¹⁴⁾

ジーベルトは20年以上、SHMFで働くベテランである。彼は、フランクの音楽祭構想をめぐる多様な言説からはこの音楽祭を芸術音楽の普及振興や、それに伴う経済的な振興にも留まらない、地域の人々の自己確立、地域のアイデンティティの確立といった精神的な効果も包含する。広義の「地域興し」として捉えてきた姿勢が窺われる。こうした理解は、2014年から運営組織を代表する総裁に就任したクーンツにも共通する。

「クラシックはエリート層の音楽、少数派の嗜む音楽で、高価なもの。そう考える社会の垣根を、この音楽祭は取り除こうとしてきた。普通の人々が、普通の音楽を聴くようにクラシックを聴いてほしいと考えたのです。私たちの音楽祭の理念は、例えば（筆者註・欧州を代表するような、著名人や富裕層が集うフェスティバルとして知られる）ザルツブルク音楽祭とは全く逆の考えで、たとえば、彼らがチケット代として400ユーロを求める公演は、私たちなら40ユーロで提供する。このように、入場料を低く設定しようとしてきたのも、バーンスタインとフランクの理念だ。それはつまり『音楽の民主化』である。（鑑賞の際）何も背広やネクタイ姿でなくとも良いし、会場の選択も、私たちには重要な要素。古い農家の納屋や、工場の跡地。そういった場所を公演会場として選んでいる。そうした考えは、彼らの理念から導き出されている」¹⁵⁾

「音楽の民主化」は、この音楽祭の創設理念を継承する上で、実に重要なキーワードといえるだろう。それを裏付けるようなSHMFの公演の数の多さ、また公演場所のヴァリエティが特筆される訳であるが、一方で、この音楽祭の公演は、総体として一体、どのような特性を持っているのか。つまり、創設者はどんな内容の音楽祭を志向していたと考えられるのだろうか。それを検討する前にまず、この音楽祭の概要を述べる。

(4) シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭の概要

SHMFは毎年7月初めから8月下旬まで約2カ月間、開催される。公演の大半はシュレスヴィヒ・ホルシュタイン州を主軸に行なわれるが、南に隣接するハンブルク¹⁶⁾、ニーダーザクセン州、また国境を超えてデンマークの一部でも、公演が行われている。

音楽祭の運営組織¹⁷⁾の中で、企画・制作部門を受け持っているのは、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭財団Stiftung Schleswig-Holstein Musik Festival（本部・リュベック）である。そのインテンダント（総支配人）を務めるクーンツからの聴き取り¹⁸⁾によると、同音楽祭の事業の柱は以下の3つに分けられる。

(i) 一般的な公演事業

(ii) 主に農村地域などで行われる「田園音楽祭 Musikfeste auf dem Lande」

(iii) 世界から選抜された若手演奏家によるアカデミーオーケストラ (SHMF では、この楽団を「祝祭オーケストラ Schleswig Holstein Festival Orchester」と呼称している) と、優れた演奏家のマスタークラスとから成る教育事業。

クーントによれば、運営側としてはこれら 3 事業を等価関係に位置付けてはいるが、聴衆からは圧倒的に (i) の一般的な公演事業が主力の位置づけにある、という¹⁹⁾。つまり、SHMF の最大の「顔」は、日本でしばしば言われるような、教育音楽祭の象徴としてのオーケストラアカデミーの公演では必ずしもない。地元ではむしろ「一般的な公演事業」によって、そのイメージが概ねつくられている、ということになるだろう。

(5) 公演を形成する 3 つの軸

そのような一般公演の企画立案は、一体どのようになされているのだろうか。クーントラによれば、SHMF は毎年、会期中の各公演のプログラムを貫く「テーマ作曲家」を選んでいる。例えば 2018 年のシーズンは、ドイツ・ロマン派のロベルト・シューマンであった。また、優れたアーティストを「ポートレートアーティスト」のタイトルを冠して起用し、アーティスト本人の要望を踏まえて会期中、本人が出演する 10 ～ 20 回の、いずれも内容が異なる公演を開催している。2018 年のシーズンは、国際的なクラリネット奏者のザビーネ・マイヤー (リューベック音楽大学教授)。

さらに SHMF では 2002 年から、「レナード・バーンスタイン賞」が設けられており、これも「一般的な公演」をかたちづくる上で重要な役有を果たしている。バーンスタインが生前、SMHF において若い演奏家の育成面に残した貢献と、自身の音楽活動によって世界の人々を結び付け、さらにクラシックやジャズ、ロック、ラテンアメリカをはじめとする民族音楽や、自らの出自に深い関わりを持つユダヤ教の典礼音楽など、様々な音楽領域に懸け橋を築いた力を顕彰する賞である。

初回 2002 年の中国人ピアニスト、ラン・ラン以降、ヴァイオリン、チェロ、オルガン、ホルン、打楽器、オルガンなどの奏者、歌手、指揮者などに贈られており²⁰⁾、毎シーズン、受賞記念の公演が行なわれている。

このように、①テーマ作曲家②ポートレートアーティスト③レナード・バーンスタイン賞受賞者の 3 要素を縦軸・横軸・垂直軸のように立体的に張り巡らせ、そこに世界で活動を広げている国際的なアーティストを招き、それら「三本柱」を巧みに活用して、ソロや室内楽、オーケストラやジャズバンドなどとの協演が形づくられていく。音楽祭の全体像が、企画されていく。そのプロセスで SHMF ならではの文化 (Culture) が、織り上げられていくように思われる。

■表 2018年8月15日(水)から25日(土)まで開催された、SHMFの公演一覧

出演アーティスト	演奏曲	日	開催地	会場
ギドン・クレメール(Vn)、クレメラータ・バルティカ	シューマン作品演奏と映像とのコラボレーション	15日(水)	フーズム	メッセ・フーズム・コンGRES
アンナ・ルシア・リッター(S)、ミハエル・ギース(Pf)	シューマンやブラメン、ブラームスの歌曲	15日(水)	ハンブルク	エルブ・フィルハーモニー小ホール
「ジェミー・バーンスタイン 夜の対話」 ジェミー・バーンスタイン(語り)、ゼバスチャン・クナウアー(Pf)	「ウエストサイドストーリー」抜粋などバーンスタインの作品、コーブランドやガーシュインの作品	15日(水)	ヴルフスハーゲン	納屋
		16日(木)	シェネフェルト	フォーラム
クリスチャン・ガルハーヘル(Br)、NDRエルブフィルハーモニー管弦楽団、クンシュトフ・ウルバンスキ(指揮)	マーラー：不思議な子どもの角笛(抜粋)、ブラームス：交響曲第2番	16日(木)	キール	シュロスホール
レナード・バーンスタイン賞コンサート チャールズ・ヤン(Vn)、SHMF祝祭オーケストラ、ウェイン・マーシャル(指揮)	バーンスタイン：「キャンディード」序曲、「ウエストサイドストーリー」から「シンフォニック・ダンス」、コルンゴルト：ヴァイオリン協奏曲	17日(金)	リュベック	音楽・国際会議場コンサートホール
ビドラ・ブー(音楽コメディ)	ギター、アコーディオ、歌等の演奏とコメディを融合	17日(金)	ハイデ	ティボリ
ザ・ビッグ・バーンスタイン(生誕100年記念公演)				
①カメロン・カーベントナー(Org)、テリー・ウェイ(CT)、SHMF祝祭合唱団 ニコラス・フィンク(指揮)	バーンスタイン：チェスター詩篇、ハシキグレイス、ミサ・プレヴィス、アイヴス：「アメリカ」によるオルガン独奏のための変奏曲、詩篇135番、バーバー：神の威厳ほか	17日(金)18日(土)	レンツブルク=ビューテルスドルフ	ノルト・アート
②ザビーネ・マイヤー(Gl)、SHMF祝祭オーケストラ、ウェイン・マーシャル(指揮)	バーンスタイン：前奏曲とワグネル、コーブランド：クプリネット協奏曲 ほか			
③マーティン・グルービンガー(Perc)、パーカッシヴ・ブラネット・アンサンブル	バーンスタイン作品 ほか			
トリオ・クラリノール、ウワガ!	アーティストと聴衆のバスツアー。行く先々で音楽と共に交歓するイベント公演	18日(土)	乗合バスで聴衆が古城やレストラン、納屋などを巡り、行き先で様々な公演を鑑賞、併せて交流するツアー	
アリス弦楽四重奏団	シューマン、メンデルスゾーンの弦楽四重奏作品	18日(土)	ケリングアーゼン	聖シリアカス教会
マーティン・グルービンガー(Perc)、パーカッシヴ・ブラネット・アンサンブル	若い聴衆のための、バーンスタイン作品公演	19日(日)	レンツブルク=ビューテルスドルフ	ACOトールマンホール
クラウス・マリア・ブランドアウアー(語り)、フレンスブルク・バウハ合唱団、セナー・ユアン管弦楽団、マティアス・イエンス(指揮)	シューマン：ゲーテの「ファウスト」からの情景	19日(日)	リュベック	音楽・国際会議場コンサートホール
ウワガ!	生演奏とバレエ、ディスコダンスとの共演	19日(日)	ヴェルデン	ウェストホーフ 温室
アルブレヒト・マイヤー(Ob)、ボリス・ギルトブルク(Pf)	シューマン：ロマンズ作品94、幻想小品集作品73、4の歌曲(オーボエとピアノ編曲版)ほか	19日(日)	ヴォターゼン	乗馬場
		20日(月)	アルデンホーフ	牛舎
ニルス・ランドグレン(Trb.Vo)、ジェニス・シーグル(Vo)、ザ・シテグライヴ・オーケストラ、北ドイツウス・オーケストラ	ジャズ畑の二人が、「レナード・バーンスタインへのトリビュート」と題し、彼が残した楽曲のいくつかをジャズ演奏の題材として活用。即興に長けたオーケストラとも共演した	20日(月)	ハンブルク	エルブフィルハーモニー大ホール
		21日(火)	フレンスブルク	ドイツハウス
ニコラス・アンガリッシュ(Pf)、ルツェルン祝祭弦楽合奏団	シューマン：東洋の絵、ガーデ：弦楽合奏のためのノヴェレッテ、ショパン：ピアノ協奏曲第1番	21日(火)	ハンブルク	エルブフィルハーモニー大ホール
		22日(水)	ブロンストルフ	牛舎
マティアス・ヘーフス(Trp)、アンケ・ティル、ルイザ・ヘーフス(Vn)ほか	シューマン、モーツァルト作品	21日(火)	フェール	聖ニコライ教会
		22日(水)	ボルデスホルム	クロスター教会
フロリアン・ウーリッヒ(Pf)	シューマン：アベッグ変奏曲ほか	22日(水)	ハンブルク	エルブフィルハーモニー小ホール
ジュリアン・プレガリディエン(T、語り)、ミハエル・ギース(Pf)	シューマン：リーダークライスほか	23日(木)	ハンブルク	エルブフィルハーモニー小ホール
ドロテア・レシュマン(S)、マルコム・マルティヌー(Pf)	シューマン：女の愛と生涯、女王マリア・スチュアートの詩ほか	23日(木)	レリッゲン	教会
ダニエル・トリフォノフ(Pf)	ショパン：ソナタ第2番ほか	24日(金)	キール	シュロスホール
マダレーナ・ハーレー(S)、ウルリケ・アンデルセン(Ms)、ミコルットヴィヒ(T)、アンドレアス・ハイネマイヤー(B)、キール・マドリガル合唱団、フレデリック・グエーブケン(指揮)、カスパー・フランツ(Pf)	シューマン：オラトリオ「バラの巡礼」	24日(金)	メルドルフ	聖堂
エルブトナル・パーカッション	ハンブルクの打楽器グループ	24日(金)	ゾンダボー	アルシオン・コンサートホール
ジャンニヌ・ヤンセン(Vn)、カメラータ・ザルツブルク、ダニエル・ブレンドルフ(指揮)	バーンスタイン：プラトンの「饗宴」からセレナーデ、シューマン：序曲とスケルツォとフィナーレほか	24日(金)	ハンブルク	聖ミハエル教会
		25日(土)	リュベック	音楽・国際会議場コンサートホール
トーマス・クヴァストホフ(Br)、ヴォルフガング・ハフナー(Pf)、NDRビッグバンド、イェルク＝アヒム・クラウ(指揮)ほか	コルトレーン：マイ・フェイヴァリット・シングスほか	24日(金)	リュネブルク	リーベスキント・オーデトリウム
		25日(土)	ハンブルク	エルブフィルハーモニー大ホール
ユストゥス・フランツ(指揮)、フィルハーモニー・デア・ナヴィオーネン、スザンヌ・バルンハルト(S)、マリー＝ヘンリエッテ・ラインホルト(A)、ゼバスチャン・コールヘッブ(T)、パウル＝アルミン・エーデルマン(B) SHMF祝祭合唱団、ニコラス・フィンク(合唱指揮)	バーンスタイン：「キャンディード」序曲、バーバー：弦楽のためのアダージョ、ベートーヴェン：交響曲第9番	25日(土)	キール	シュバルカッセン・アリーナ

2018年8月15日(水)から25日(土)までに開催された、SHMFの公演一覧(同音楽祭公式プログラムを基に著者作成)

3. 公演の概観と、特性に関する考察

(1) 「一般公演」の特性を探る — 2018年8月15日～25日の公演を手掛かりに

筆者はこれまで、SHMFの公演回数が多いことに、しばしば触れてきた。クーンツに聴き取り調査を行った2018年は(i)から(iii)に関わる公演数は202回で、前年2017年のシーズンの193回から9公演、増えている。2018年の出演アーティスト、オーケストラや合唱団を含む団体の数は249にも及んでいる²¹⁾。

しかし本項で、この200回すべてを検討対象として扱うのは、いささか筆者の手に余る。そこで筆者が2度目の現地調査で滞在した2018年8月15日(水)～25日(土)の開催プログラムを軸に、SHMFの事業として行われている公演を概観し、そこに見られる特性について考察を試みることにしたい。

表は、同期間のおよそ10日間、SHMFで開催された公演の一覧である。休みも無く連日、公演が開催されていることが分かる。同じアーティストが同一プログラムを同一会場で2回続けて、或いは同一アーティストが同一プログラムを別期日に異なる会場で、など様々なパターンで出演していることが見て取れる。約200公演といっても実際には、個々の公演全てが一つひとつ独自の内容ではなく、同じ、または類似のプログラムを州内各地に巡演させるような運営構造があることが窺われる。また、このシーズンは、創設者バーンスタインの誕生100年の節目にあたり、記念の公演が多数行われたことを申し添えておく。

さて、これら公演群に宿る特性について、いくつかの観点から検討を加えてみたい。筆者がチケットを入手でき、実際に生演奏に触れ、調査できた公演は残念ながら限られる。そこで、同音楽祭の公式プログラムの記述も参照しながら、検討する。

表を見てまず気付かされるのは、クラシックの、オーソドックスなりサイタルが少なくない一方で、この音楽祭の公演が体現している、日本の、とりわけ地方都市では、まだ触れることの多くないような、或る「多様性」をはらんだ公演群の存在である。日本の、通常のクラシック音楽公演の感覚でいえば、まだあまり触れることの少ない分野との協働が、数は限られてはいるものの、ここでは少なからず見られるように思われる。それは例えば、以下のようなものである。

(2) 音楽の多様性に関わる公演

ポピュラー音楽の包摂—20日、フレンスブルクの歴史的建造物「ドイツハウス」における、ニルス・ランドグレン、ジャニス・シーゲル、ザ・シュテグライフ・オーケストラほかによる公演

スウェーデン出身のトロンボーン奏者兼ヴォーカルのニルス・ランドグレンと、アメリカの人気ジャズコーラスグループ「マンハッタン・トランスファー」のメンバーとして知られるジャ

ニス・シーゲルのセッションである。2018年は、レナード・バーンスタインの生誕100年の節目にあたり、ミュージカル《ウエストサイドストーリー》、《ワンダフル・タウン》の中の楽曲を取り上げて即興演奏を披露、聴衆は公演終盤、ほとんどが立ち上がって拍手を送るほどの熱狂ぶりを示した。

共演の、ザ・シュテグライフ・オーケストラ STEGREIF. orchestra に注目したい。クラシック音楽のほかジャズや、ユダヤ由来のクレズマー音楽、ブルース

やロック、民俗音楽をも手掛ける新鋭のアンサンブルである。彼らは指揮者を置かず暗譜で、また立奏によって、豊かな身体表現を伴う即興演奏を得意としている。

すなわち予め譜面に書かれた音楽を再創造するという、オーソドックスなクラシック音楽の演奏家・グループとは異なり、個人の音楽性の自由な発露を即興演奏によって表現するグループである。ランドグレンとシーゲルの体現する、即興性に富んだ演奏との親和性が求められると思われたところ、高い技術力に裏付けられたパフォーマンスが見事に実現されていた。

ジャズを取り入れた公演は他にも、18日（土）・19日（日）の両日、レンツブルク＝ビューデルスドルフ町境にある「ACO トールマンハレ」における打楽器奏者マーティン・グルービンガー（2007年レナード・バーンスタイン賞受賞者）らによる子ども向けプログラム「Let's make music as friends」があった。また24日・25日、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州外のリュネブルクやハンブルクにおける遠征公演、バリトン歌手トーマス・クヴァーストホフと北ドイツ放送協会（NDR）のジャズ・バンドとの共演などでも見られた。

さらに18日（土）・19日（日）の両日午後、同じく、レンツブルク＝ビューデルスドルフの現代アート施設「ノルト・アート」（旧鑄鉄工場）で行われた「ザビーネ・マイヤー（クラリネット）と SHMF 祝祭オーケストラ公演」では、2018年の「ポートレートアーティスト」であるザビーネ・マイヤーが、バーンスタインのジャズ作品《前奏曲、フーガとリフ》を、コーブランドの《クラリネット協奏曲》などと共に演奏した。



ニルス・ランドグレンとジャニス・シーゲルらが出演したジャズ公演＝2018年8月20日、フレンスブルクで筆者写す

(3) 他の芸術領域と関わる公演

筆者が検討対象の期間として設定した8月15日から25日の期間はこのほかに、他分野のアートとの協働公演が行なわれていた。

①ビジュアルアートとの協働－15日、
フーズムのメッセ・フーズム・コング
レスにおける公演

ヴァイオリン奏者ギドン・クレーメル率いるバルト三国（リトアニア・ラトヴィア・エストニア）出身の音楽家によるアンサンブル「クレメラータ・バルティカ」公演。シリア人彫刻家ナジール・アリ・バードルの、小石を用いて人間を模した小さな彫刻を使い、まるで粘土細工のアニメーションのような繊細な表現映像と共に、この年の、SHMFの「テーマ作曲家」であるシューマンの《東洋の絵「6つの即興曲」》などを、演奏する舞台だったと思われる²²⁾。



オーケストラ公演でスクリーンに映し出された、1987年のシーズンにおけるレナード・バーンスタイン（右）とユストゥス・フランツ（左）＝2018年8月25日、キールで筆者が写す。スクリーン上の画像 ©Horst Pfeifer

②語りとの協働－15日、ヴルフスハーゲンの農家の納屋における公演

レナード・バーンスタインの長女で作家・ナレーター・映像作家のジェミー・バーンスタインを起用した「ジェミー・バーンスタイン 夜の対話」公演。バーンスタイン作曲の《7つの記念》、《4つの記念》といったピアノ小曲集を、ドイツのピアニスト、ゼバスチャン・クナウアーと共に演奏した。

これら小曲集には、バーンスタインの恩師であり、彼の音楽家としての自己確立に大きな影響を与えたロシア出身の指揮者セルゲイ・クーセヴィツキーや、バーンスタインと親しかった作曲家デヴィッド・ダイヤモンド、また秘書ヘレン・コーツといった諸人物が、「音楽的な肖像」として描かれている。ジェミーは、バーンスタインの娘として身近に暮らした経験を交え、父と彼らの交歓を語った。バーンスタインの写真がスクリーンに映写もされた。

こうした朗読を伴う公演は他にも、19日のリュウベックのコンサートホール、23日のハンブルクの「エルプ・フィルハーモニー小ホール」でも行われた。このような、語りや現代のビジュアルアートなど、音楽演奏だけにとどまらない異分野の表現領域との協働企画としては、この期間中、他にバレエやディスコダンス、演奏とコメディを併せ演じるアーティストの公演も行われていた。筆者は鑑賞できなかったが、SHMFにおける事業企画の際の芸術的視野の幅広さを示すものと言えるかもしれない。

(4)「特性」についての考察－「多様性」への視点

これまでに挙げてきた事例を踏まえて筆者は、SHMFの一般公演に見られる「特性」として、

次のようなことが考えられるのではないかと考えている。

SHMFでは「テーマ作曲家」の作品を取り上げる公演や、「ポートレートアーティスト」、「レナード・バーンスタイン賞」受賞者といった、この音楽祭と特別な関係を結ぶアーティストたちの公演においても、オーソドックスなクラシック音楽（E-Musik＝真摯な音楽）の演奏にとどまらず、娯楽的要素を持つU-Musik（娯楽音楽）の演奏にも対応できるような演奏家としての在り方を求めていることが感じ取れる。換言すれば、「クラシック音楽以外にも、多様な音楽性を併せ持つアーティスト」こそが、SHMFと特別な関係を結ぶべき、と位置付けていることが推察されるのである。

このことは、前年2017年の「バーンスタイン賞」を受けた米国生まれのヴァイオリニスト、チャールズ・ヤンが同年8月17日、リューベックのコンGRESハレで行われた受賞記念公演において、後期ロマン派に属するエーリッヒ・コルンゴルトの協奏曲を演奏したのち、共演した祝祭オーケストラのメンバーともどもヒップホップ調の即興的な演奏をアンコールで弾き、聴衆の喝采を浴びていた光景を髣髴とさせる。クラシック一辺倒でない音楽性を備えている事が、SHMFの特別なアーティストとしては聴衆からも企画者からも歓迎される。そんな印象を受けたのであった。

SHMF財団のクーントは、こうした多様な公演企画の基礎には、音楽祭創設に携わったレナード・バーンスタインの創作姿勢、それを支えた彼の音楽的な多様性への「オマージュ」があるという²³⁾。バーンスタインはニューヨークやウィーン、ロンドン、エルサレムの名門楽団などでクラシックの指揮者として活躍する傍ら、大衆が好むブロードウェイのミュージカルナンバーや、ジャズやラテンのリズムを取り込んだ交響的作品を残しもした。元々ロシアからアメリカに移住したユダヤ系移民の子であり、若い時代から多様な音楽文化に関心を示していた。

1939年、ハーヴァード大学卒業時の学位論文は「アメリカ音楽におけるさまざまな人種的要素の吸収 The absorption of Race Elements into American Music」である。バーンスタインは、この卒業論文の中で、アメリカで創られた音楽における民族音楽の要素に強い関心を示している。「人種の坩堝」と当時すでに呼ばれた米国において、全米で普遍性を獲得できる音楽が何であるかを考察していた。卒論執筆の時点で、彼がそうした普遍性を獲得している、と判じたのは、米国社会に見られる二つの音楽的要素だった。一つは、バーンスタインの故郷でもあるニューイングランド地方の入植者たちの音楽。プロテスタントのコラールや、イングランド・アイルランド・スコットランドの民俗音楽の資源も含んでいる。19世紀の大移住によって米国東部から「西部へと伝えられ、マサチューセッツやジョージアと同じくカリフォルニア、ミネソタ、ケンタッキーでもバラードや讃美歌やおどりになった」²⁴⁾。

彼によれば、もう一つは、よりいっそう重要なもので、人々の西部への移住ではなく、ジャズとして知られる20世紀の音楽的な現象によって普及した、と述べている²⁵⁾。「アメリカの

作曲家は、その先祖にしたがって、どちらかまたは両方を利用している。ジャズの影響はすべてのアメリカ人に共通している」²⁶⁾。バーンスタインにとってジャズは、「民族音楽としてのアメリカの音楽」に著しい刻印を残した音楽的要素として極めて重要な位置付けを与えているように思われる。

若い時代から、音楽文化の多様性に鋭い関心を向けており、長じて指揮者や教育者の傍ら、作曲家として創作する際も、西洋芸術音楽だけでなく、広範囲の、また同時代の、さまざまな音楽文化に触れ、積極的にそれを自作に取り入れようと努めたと思われる。

1990年の、札幌におけるPMF創設の折にバーンスタインは、知人の中国人作曲家、周文中 Chou Wen-chung と連携していた。周は、初回PMFと連動する形で、札幌においてほぼ同時期、「太平洋作曲家会議（PCC）」を主宰した。この営みは同年10月のバーンスタインの死去に伴い、一度限りで潰えたが、周は筆者の聴き取りに対し、当時バーンスタインと共有していた音楽的な思想について証言したことがある。

「演奏というものは、程度の差はあっても、過去、の作品についての活動であり、未来を考えるうえでは、それだけでは十分ではない。研究や実験的な試みといったものが統合されているべきだと私はおもうし、バーンスタインはそれを全面的に受け入れてくれていた」²⁷⁾

周のこの発言は、本論考で最初に述べた札幌の「教育音楽祭」であるPMFの理念や事業に関わるものである。SHMFにおけるバーンスタインの音楽的な理念を考える上では、必ずしも適切ではないかもしれない。しかし、晩年に到るまで新しい音楽の創造や生成に興味を持ち、文化多元主義的な立場で、異文化や異分野との協働に、関わりを持とうとし続けたバーンスタインの姿勢が感じられる言説に思われる。彼が創設に携わったSHMFの承継者としてのクーントが、バーンスタインの音楽活動全般に関わる理念を、こんにちのSHMFの公演事業展開の基礎に据え、クラシック音楽以外の多様な音楽要素を事業に取り込んでいこうとする姿勢は、自然とも思われてくる。現代アートや語り、ダンスや映像といった音楽以外のジャンルとの協働もまた、「異なる文化」との接触による新たな創造や生成を尊んだバーンスタインの理念を伝承する営みと受けとめることが出来よう。

実際、クーントは「私は、彼の創作のインスピレーション、彼の音楽の『多様性』を受け継いでいきたい。それを現代に合わせていかに人々に提示していくか、が課題」と話していた²⁸⁾。SMMFの2018年のシーズンには、今回の研究対象とした期間以外の日程で、ロマ族のヴァイオリン奏者ロビー・ラカトシュとそのアンサンブル（7月5日木曜 ヴェーデルの農場施設ほか）、南アフリカのコーラスグループ（7月16日月曜 フェーマンのヨハネスブルク宮など）といった民族音楽の性格が濃厚な公演も行われており、諸民族の音楽文化への視線も感じられた。

このように考えると、クラシック以外の音楽や音楽以外のジャンルとの協働は、SHMFの特性を少なくとも部分的に形づくっている、と言えるのではないか。とりわけジャズについては、先に述べたニルス・ランドグレンと関わりの深いジャズ音楽祭「ジャズ・バルティカ Jazz Baltica」が2002年以来、SHMFの一部分を構成している。このことは音楽祭としてとりわけジャズを重用している証といえよう。バーンスタインは昨年に来るまで、一貫して「ジャズへの愛」を語ってやまなかった²⁹⁾。創設者の理念を継承するインテンダントとして、諸公演の企画立案にあたりジャズの重視をはじめ、バーンスタインが体现しようとした「多様性」を長く意識していることが感じられる言説だった、と筆者は受け止めている。

(5) 「レジャー」「エンタテインメント」への視線—古城、浜辺、農村の野外公演

さて、これまで述べてきたような、芸術領域における協働以外にも、「多様性」を窺わせる試みは幾つか見られる。ここではその中から、聴衆・観衆の「余暇活動（レジャー）」、あるいは「エンタテインメント」へのニーズに、より直接的に応えようとするような事業について記しておきたい。

SHMF 公式プログラムによれば、8月18日（土）、開催された「Slotsmusik-Tour」は、音楽演奏と古城見学などを組み合わせた、約8時間の古城見学付き公演である。プログラムには「南デンマークで最も美しい城へのツアー」との記述があり、デンマークのヨアキム王子が1993年から2014年まで居城としたシャウケンボー城と、ゾンダボー城それぞれで各1時間程度の生演奏を聴くことが記されている。また、デンマーク料理を味わう趣向もある。

出演は、音楽グループのウワガ Uwaga!。クラシック・ジャズ・ロマ音楽・パンクロック・即興演奏に長けた、「ジャンル越境」的な音楽家によるアンサンブルである。また、彼ら同様、クラシックから幅広いポピュラー音楽のレパートリーを持つクラリネットアンサンブル「トリオ・クラリノワール」も出演していた³⁰⁾。

こうした「レジャー」への志向を窺わせる公演としては他にも、「Strandkorb Konzert」が挙げられる。8月6日（月）夜、北海沿岸の町ヴァンゲルスの浜辺が会場として設定された。同地には3キロにわたる渚があり、家族向けの保養地として知られている。浜辺にドイツ式のビーチチェアを持ち出し、海の輝きを見ながら演奏を楽しむという趣向である。出演は、音楽コメディグループ「ビドゥラ・ブー」。

自然の中で音楽を楽しむ事業としてはさらに、主に農村地域などの野外で行われる「田園音楽祭 Musikfeste auf dem Lande」があり、SHMF 会期中、プロンストルフ、シュトックゼー、ハッセルベルク、エムケンドルフ、ヴォーターゼンといった人口数百人の小村、あるいは1万人ほどの小都市合わせて5カ所で、「音楽祭の中の音楽祭」が開催されている。

このように、聴覚のほか、視覚、触覚、味覚や嗅覚といった、五感を刺激する公演の在り方は、自然に恵まれた「辺境」としての、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州の特性を音楽祭と

しての個性へと昇華する営みとして、評価することができるかもしれない。必ずしもクラシック音楽を好まない人々をも音楽祭にいざなう取り組みと考えられ、このことはユストゥス・フランツが唱えた「万人のための音楽」という理念を体現する営みとしてみることも可能だろう。少なくとも、クラシック音楽に特化した学識やセンスにとどまらず、それ以外の音楽、それ以外の社会的事象、それ以外の地域的なアドバンテージを客観的に見いだして、音楽祭の公演へと結実させていく。音楽事業の対象を、単に当該音楽の直接の愛好者だけに限らず、常に拡張していく。そうした「社会的存在としての音楽事業」を志向するアートマネジメントの、一つの象徴と位置付けることが出来るように思われ、これもまた広義の、「音楽の多様性」を醸す方策の一つとして、捉えることができるのかもしれない。

まとめに替えて

ここまで、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭の「一般公演」について、その「特性」について考察を試みてきた。2カ月間のシーズン中、総計200回を超えるマンモス音楽祭のそれを探るには、もともと検討対象期間を限定する手法そのものに、部分から全体を見ることの危うさ、「一斑を見て全豹をト（ぼく）す」ような面があることを、筆者は弁えている所存ではある。しかし逆に、身近な「木を見て森を見る」可能性も、あながち無きにしも非ずではないか、という気もしている。

このように考えるのは、現在のSHMFの公演企画を担当しているクアントが、この音楽祭創設者のユストゥス・フランツなり、レナード・バーンスタインなりの当時の言説について、短期間、音楽祭の一端に触れるだけでも、SHMFにおけるバーンスタインら音楽祭創設者の理念の承継の営みが感じられたためである。深い思索を重ねていることが、聴き取り調査の折の言説から、強く感じられたためである。「バーンスタインの音楽に宿っている『音楽の多様性』を受け継いでいきたい」という言葉はとりわけ、彼の企画の成果というべき、一つひとつの公演内容を筆者がたどる中で、或る拠りどころとして作用した。音楽に限らず、いかなる事業においても創設の理念の継承は難事であるように思われる、多くの場合、それは往々にして、容易に喪われてしまう。そして理念を喪った事業はしばしば迷走する。まず、理念を踏まえ、そして音楽を取り巻く社会の動きを注視し、それを意識し、大衆の嗜好を知り、それを意識し、地域の特性を知り、それを意識し、常に創造的に事業を企画していく。その営みの尊さを感じずにはいられない。

SHMFの公演企画プロセスの中で、毎シーズン替わる「テーマ作曲家」や、シーズンごとの出演者の顔、というべき「ポートレートアーティスト」、或いは創設者バーンスタインの音楽家としての流儀を継承する存在としての「レナード・バーンスタイン賞」受賞者の存在は、プログラム全体を一つの文化（culture）として編み上げる上での大きな「核」と言える。生物の体が、同一の「遺伝子」を共有する細胞から構成されるように、SHMFのプログラムも

また、クーンツがバーンスタインらから継承した「音楽の多様性」という遺伝子で以て編み上げているのであるならば、今回の論考がたとえ短い「切片」の検討・分析であっても、そこから見えてくる遺伝子の姿はあるのではないかと筆者は考えた。

しかし、この論考で触れた、クーンツが自ら捉えているところの、バーンスタインの音楽に宿る「音楽の多様性」なるものが果たして、バーンスタイン自身が理解していたそれといかなる関係にあるのかは、慎重な研究が必要となろう。例えば、バーンスタインと同時代を生きた、20世紀の前衛音楽、実験音楽の取り扱い状況の把握には、慎重な調査を要する。バーンスタインの創作物たる音楽作品の特性をめぐる研究をはじめとして、彼の指揮者としての、ピアニストとしての、また教育者としての活動の足跡を引き続き、たどっていかねばならない。彼が何者であったのか、それを見つけ出すための「レナードを追う旅」は終わることがないと思われる。

クーンツがともかく自分なりにそれを手に入れ、SHMFを音楽的に設計し、その実施に奔走しているのを見る時、筆者もまた自分自身で、「音楽の多様性」の真実を掴まねばならないと考えずにはいられない。しかもそれは単に、学術的な理念というよりは、21世紀の音楽事業に（具体的にいえば、北海道のパシフィック・ミュージック・フェスティバル PMF に）、何らかの形で、また部分的ではあっても「参照」できるような、示唆に富み、企画制作の現場で実現可能な理念であることも重要に思われる。

その意味で本論考には欠けている点がある。まずは「多様性」に関する、概念の整理である。もともとは生物学の分野で論じられていたこの概念はいまや、環境や社会、人間の性や芸術文化を論じる際に、極めて重要なキーワードとなってきた。インターネットが普及し、人々がかつてよりは容易に世界旅行をできるようになった現代における、「音楽の多様性」の確保とは何か、それは一体、どのようなものであるべきか、を見定めていかねばならない。SHMFもPMFも（少なくとも現在は）西洋芸術音楽（クラシック）の演奏や教育を軸とする音楽祭ではあるのだが、現代において、「音楽の多様性」を重視するには、具体的にどのような事業展開が求められるのか。これはなかなか重い課題である。バーンスタインの豊かな言説に触れ直し、その現代的意味を読み取り、現代において、現実の音楽事業として創り上げる力が問われているのは、ひとり音楽マネジメントの現場に限ったことではないだろう。

注

- 1) 日本音楽芸術マネジメント学会編集委員会編『音楽芸術マネジメント』第11号 2019年
- 2) 人口と面積は在ハンブルク日本国総領事館まとめによる（2020年2月27日最終確認）。
https://www.hamburg.emb-japan.go.jp/downloads/schleswigholstein_info.pdf
- 3) 同上
- 4) 例えば、PMFを主催する公益財団法人PMF組織委員会編集・発行の『PMF BOOK（公

式プログラム) 2017』の中の特集記事「MUSIC FESTIVALS AROUND THW WORLD」(筆者: 片桐卓也=音楽ライター)に、「教育的音楽祭の代表格がタングルウッド音楽祭(アメリカ)、シュレスヴィヒ=ホルシュタイン音楽祭(北ドイツ)、そしてPMFである」との記述がある(p.67)。こうした記述はメディアにも見られ、2018年7月6日付北海道新聞朝刊 特集記事「北海道から平成がわかる パシフィック・ミュージック・フェスティバル(PMF) 若手音楽家 成長の場」では、この音楽祭が「タングルウッドやドイツのシュレスヴィヒ・ホルシュタインと共に『世界三大教育音楽祭』に数えられるまでになった」と書かれている(p.14)。

- 5) 例えばAlexander Bernstein & Christian Kuhnt, *Leonard Bernstein – I fell in Love with Schleswig Holstein*, Wachholtz 2018 p.46 また、Rolf Beck, *Das Schleswig-Holstein Musik festival. Das Fest Zwischen den Meeren*, 2006 Murmann Verlag p.7 など
- 6) Werner Burkhardt, Beatrice Kolster, Eckardt Opitz, Cordt Schnibben und Volker Skierka, *Sinfonie in Herrenhäusern und Scheunen*, 1988 Rasch und Röhring Verlag p. 28-34 に詳しい。
- 7) Alexander Bernstein & Christian Kuhnt, *Leonard Bernstein – I fell in Love with Schleswig Holstein*, Wachholtz Verlag 2018 p.16
- 8) Alexander Bernstein & Christian Kuhnt, *Leonard Bernstein – I fell in Love with Schleswig Holstein*, Wachholtz 2018 p.11
- 9) Werner Burkhardt, Beatrice Kolster, Eckardt Opitz, Cordt Schnibben und Volker Skierka, *Sinfonie in Herrenhäusern und Scheunen*, 1988 Rasch und Röhring Verlag p.29
- 10) 税金による芸術文化支援の論拠として片山泰輔は、(1) 文化遺産説 (2) 国民的威信説・地域アイデンティティ説 (3) 地域経済波及説 (4) 一般教養説 (5) 社会批判機能説 (6) イノベーション説 (7) オブション価値説 - を挙げている。「なぜ芸術文化を税金で支援するのか?」『都市問題』第90巻 第7号 1999年
- 11) 2018年8月25日、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州キール
- 12) Werner Burkhardt, Beatrice Kolster, Eckardt Opitz, Cordt Schnibben und Volker Skierka, *Sinfonie in Herrenhäusern und Scheunen*, 1988 Rasch und Röhring Verlag p.58-59
- 13) 同上 p.31
- 14) 2017年8月14日、リユーベック
- 15) 2017年8月7日、リユーベック
- 16) ハンブルクはベルリンなどと同様、都市でありながら一つの独立した州である。
- 17) SHMFの運営は主に、4つの組織によって行われている。シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭財団(Stiftung Schleswig-Holstein Musik Festival)と、シュレスヴィヒ・ホ

ルシュタイン音楽祭協会 (Schleswig-Holstein Musik Festival e.V.)、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭スポンサー組織有限職業責任会社 (Sponsorengesellschaft des Schleswig -Holstein Musik Festival mbH)、そして SHMF 有限責任会社 (SHMF Service GmbH) である。このほかバイラート Beirat (音楽祭支援のため、多様な役割を果たす役職。ここでは、ひとまず顧問、或いは相談役と訳しておく)、さらに多数のボランティアが運営を支えている。

- 18) 2017 年 8 月 7 日、リューベック
- 19) 同上
- 20) 2018 年 8 月 17 日、Preisträgerkonzert Leonard Bernstein Award (リューベック 音楽・国際会議場コンサートホール) で配布された公式プログラムノートによる
- 21) SHMF2018 公式プログラム p.86
- 22) 創作の一端に、ネット上で触れることができる。<https://www.youtube.com/watch?v=tJ7HC7zgDSg> (2020 年 2 月 27 日最終確認)
- 23) 2017 年 8 月 7 日、リューベック
- 24) レナード・バーンスタイン著 岡野弁訳『バーンスタイン わが音楽的人生』作品社 2012 年 p.36-37
- 25) 同上 p.37
- 26) 同上
- 27) 2003 年 7 月 11 日、ニューヨーク
- 28) 2017 年 8 月 7 日、州リューベック
- 29) 例えば、L・バーンスタイン、E・カスティリオーネ著 西本晃二監訳 笠羽映子訳『バーンスタイン 音楽を生きる』青土社 1999 年 p.74-86 参照。「私は、ジャズを二流のカテゴリーに属する音楽ジャンルとして定義する人たちの考えを認めない」といったバーンスタインの言説が紹介されている。
- 30) 地元紙 Der Nordschleswiger の 2018 年 8 月 21 日付の Volker Heesch 記者の報道によれば、このツアーでは、ふだん公開されていない城内の見学、城内の美術品鑑賞、建築家についてのレクチャーなども行なわれ、食事のほか歓迎のシャンパンが振る舞われた、との記述がある。Uwaga! の公演では、モーツァルトとボブ・マーリーの作品による、真正のクロスオーバー音楽「レゲエ風協奏曲」が奏でられた、と記されている。